

平成29年1月4日

平成29年学長年頭挨拶

岩手大学長 岩渕 明

明けましておめでとうございます。

私は寝正月でしたが、皆様は一週間の年末年始休暇で普段できないことをし、リフレッシュされたことと存じます。

平成29年がスタートしましたが、大学を取り巻く環境は決して好転はしておりません。我々岩手大学の構成員が描く大学像と社会が期待する大学像にはまだまだ乖離があり、継続的な改革が強く求められております。昨年4月には学部の改組を行いました。新年度スタート時には大学院の改組が行われます。今年度(平成28年度)の残り3カ月で諸規則関係や事務体制などの準備を、スピード感を持って行わなければいけません。総合科学研究科への一本化、地域創生専攻の設置は、これまでの復興支援活動の成果を教育と研究に活かしていくための方策です。これまでの学部の壁を越えて全学一体となって地方大学の責務を果たしていくことが岩手大学にとって重要ですが、この組織が上手く機能するように全員で努力することが今年の最重要事項と考えます。

クリスマス前後に文部科学省から平成29年度の予算の内示がありました。最終的には国会での予算案が可決された後での決定ですが、運営費交付金の削減(前年度比0.9%)に対し、機能強化経費等で全体の予算規模は前年度よりも増額にはなっておりますし、農学部滝沢農場の建物の改修費用も計上されております。財政的な厳しさは変わりませんが、本学の来年度の予算案を作成するときには、できるだけ教育研究の環境の改善を図りたいと考えております。

先日の経営協議会でも議論しましたが、岩手大学のブランドとは何でしょうか。第3期のスタートにあたり、私はグローバルな教育・研究、復興活動の継続、アイデンティティの涵養により地域を先導する大学づくりを掲げました。教育でいえば、COC事業における地域関連の講義がスタートしましたが、PDCA的に講義の実質化を図っていくことが必要です。また先月、「トビタテ！留学JAPAN」のプログラムに採択されましたが、学生のみならず教職員の国際交流も、あるいはコミュニケーションツールとしての英語力の向上のための方策も行わなければいけません。復興関連としても三陸復興・地域創生推進機構を中心に種々事業を企画し展開する予定です。また、各部局をはじめとして4つの全学研究センターにおける特徴ある研究力向上は大学のブランド化に必須です。全学研究センターの研究あるいは地域連携のミッションをあらためて明確にし、関係する人々がそれを共有することが必要です。

最後に述べておきたいことは、部局を越えた連携の強化です。各学部と全学施設、事務部の各部署は全く独立したものではなく、人の面でもお金の面でも共助することで効率よく事業を進めることが可能であろうと考えます。特に地域創生専攻は従来の教育・研究組織とは全く異なるものであり、学部や支援施設、事務部の支援が必要です。これらの連携により新たな岩手大学のブランドの創出につながると考えております。

正月の大学駅伝をテレビで観戦しながら、強豪校が3～5年ごとに変っていくことの原因を考えていました。結論的には指導者(監督)の体力的・精神的な熱意の低下が大きいのではと思われました。学長としてこれから3年間も、熱意を持って業務にあたらなければとあらためて自覚しました。年頭の学長挨拶の終わりにあたり、「皆さんと一緒に新たな挑戦をしていきましょう」との言葉で結びといたします。